

惜ムデ不見セヌヲ恠ガリテ引奪テ見レバ、蛇ヲ四寸許ニ切ツ、入タリ、奇異ク思テ此ハ何ノ料
ゾト問ヘドモ、女更ニ答フル事无クテ□□テ立テリ、早ウ此奴ノシケル様ハ、楚ヲ以テ藪ヲ驚カ
シツ、這出ル蛇ヲ打殺シテ切ツ、家ニ持行テ、鹽ヲ付テ干テ賣ケル也ケリ、太刀帶共其レヲ不
知ズシテ買ヒテ役ト食ケル也ケリ、此レヲ思フニ、蛇ハ食ツル人惡ト云フニ何ト蛇ノ不毒ヌ、然
レバ其體慥ニ无クテ切々ナラム魚賣ラムヲバ、廣量ニ買テ食ハム事ハ可止シトナム、此レヲ聞
ク人云、繚ケルトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔百家琦行傳三〕蛇喰八兵衛

常陸國龍が崎に、山田屋何がしの家の下僕八兵衛といふ者ありけり、性惡食を事とす。○中一日
同じ村の莊官より、山田屋へ使をつかはし、下人八兵衛を些しの間、借うけ度よしを史たのみ越しけ
り、奈何なる事ともわきまへねど、且八兵衛を呼て斯と知せ、莊官の家へつかはしけり、斯て莊官
八兵衛を呼て語て曰く、近頃我家の前栽のうちへ、兩頭の蛇きたりて徘徊す、これを看人遠から
ず死るといふ事、昔より云傳て、人の怕る事、唐土の叔敖が古事にてても知べし、蛇は執心深き者ゆ
ゑ殺しても念を残し、其人に仇するといへり、況や兩頭の蛇においてをや、爰をもて我思に、かの
蛇くひてまはは、形も残らず、念をのこす處なかるべし、爾何とぞ彼蛇をくひてくれよ、然らば
其酬謝には二十金を備に與ふべしといひければ、八兵衛略○中 點頭うなづきいつにてもあれ、其蛇いで侍
らは、疾く知せ給はるべし、小僕参りて暗さふらはんと云て、當日は家に歸りけり、四五日を経
て、莊官よりむかへの人來りけるにぞ、八兵衛急ぎ莊官の許に往て看に、彼兩頭の蛇、前栽の松樹
の下に圓蟠うつくまて居りける、八兵衛は手に鍬を持って、忍足にす、みより、彼蛇をまた、かに打ければ、
蛇は大いに怒り、鎌頭をもたげて、八兵衛が方へ越り來る。○中 處を扯ひきとらへて、皮をはぎ、菜刀に
て三五寸程づ、に斬、醬油をつけて、殘す喰ひ、二固ふたつの頭と皮と骨とは、火にてよく燒炭のごとく